東京慈恵会医科大学 4附属病院広報誌

よつば 第9号

附属病院（本院）
葛飾医療センター
西部医療センター
柏病院

広報誌「よつば」について

東京慈恵会医科大学は４つの附属病院を有しています。「四つ葉のクローバー」のように４病院が有機的につながり合い、力を合わせ、患者さんを中心とした医療を実践していくという思いを込め、誌名としました。









Contents

特集

災害時に地域を支える4附属病院

東京慈恵会医科大学
救急災害医学講座 講座担当教授　武田 聡

TEAM JIKEI
～全ては患者さんのために～
病院を支えるコメディカルの紹介（中央検査部編）

Jikei History Vol.8
評伝 学祖 高木兼寛
―還暦すぎてオーナー･ドライバーに―











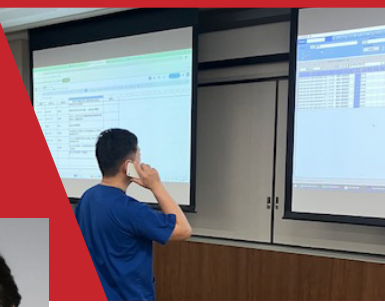


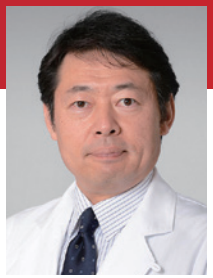

慈恵医大4附属病院ってどんなところ？

災害時に地域を支える4附属病院









東京慈恵会医科大学
救急災害医学講座
講座担当教授
武田 聡
Satoshi Takeda

東京慈恵会医科大学の４つの附属病院は、すべてが「災害拠点病院」に指定されており、建学の精神「病気を診ずして病人を診よ」のもと、首都圏全域を支える強力な医療救護ネットワークを形成しています。平時の高度医療や救急医療はもちろん、大規模災害発生時には４病院が協力し、地域社会と被災者の命を守るために多角的な役割を果たします。

1. 首都圏を網羅する広域相互支援ネットワーク

東京都心、23区東北部、東多摩（23区西）、千葉東葛地域に分散配置された強みを活かし、首都直下型地震などで一帯が被災した際も、他病院が素早くバックアップを想定しています。医療スタッフの派遣、医薬品・資機材の融通、傷病者の広域転送受入を迅速に行い、地域全体の医療崩壊を防ぎます。

2. 重症傷病者の受け入れと高度医療の提供

多数の傷病者が発生した際には、迅速なトリアージを実施。大学附属病院ならではの高度な専門診療機能と集中治療体制をフル稼働させ、一般医療機関では対応困難な重度外傷や熱傷などの救命処置・緊急手術を24時間体制で遂行できる体制を整えています。

3. 災害派遣医療チーム（DMAT）の即応・展開

4病院全てに訓練を受けたDMAT隊員が配備されており、全国どこでも大規模災害が発生した時には、発災直後から被災現場や避難所、広域搬送拠点へ隊員を派遣する体制を整えています。統括DMAT資格を持った医師やコーディネーター資格を持った隊員も多数おり、現場での救命活動だけでなく、被災自治体の医療本部における総合調整など公的救護活動の中核を担います。

4. BCP（事業継続計画）に基づく途切れのない医療

4病院全てで自家発電設備、給水インフラ、医薬品備蓄、耐震・免震構造などを完備。ライフラインが遮断された環境下でも数日間は自立して医療を継続でき、災害急性期の救命だけでなく、人工透析や周産期医療など継続治療が必要な患者の命も守ります。

慈恵附属4病院はすべてが「災害拠点病院」、地域医療の最後の砦として機能しながら、4病院が一体となった総合力を発揮し、首都圏全体の安心と安全を支え続けます。

地域災害医療を担う4附属病院

附属病院（本院）

有事に迅速、適切に対応できる体制を整備しています



東京慈恵会医科大学附属病院は、地域災害拠点病院として、災害時にも途切れることのない医療の提供を目指しています。日頃から職員教育や災害訓練、行政・消防・地域医療機関との連携を推進し、有事に迅速かつ適切に対応できる体制を整備しています。地域の皆さまの命と健康を守るため、平時から災害への備えを続けています。

葛飾医療センター

平時より大規模災害に備え、訓練しています



当院は東京都から災害拠点病院の指定を受けており、24時間緊急対応し、災害発生時に被災地内の傷病者等の受入れ及び搬出を行うことが可能な体制を整備しています。また、災害派遣医療チーム（DMAT）を1隊保有しており、有事の際には隊を被災地に隊を派遣することが可能です。平時より大規模災害の発生に備えて、院内外で訓練を実施しています。

西部医療センター

災害時も地域医療を支える体制を整えています





当院は、狛江市・調布市を中心に、北多摩南部から世田谷区までの広域医療を支える基幹病院として、救急・災害医療を担っています。地域災害拠点病院として、大規模災害時には傷病者の受入れや被災地への医療支援を行うほか、東京都指定二次救急医療機関として24時間体制で救急医療を提供しています。さらに、DMAT体制の強化や自治体との防災訓練、医薬品・食料の備蓄充実を進め、災害時も地域医療を支える体制を整えています。

柏病院

千葉県～広域災害までDMATを派遣し活躍しています

地域災害拠点病院・三次救急医療機関の柏病院は、災害時に「DMAT東葛北部活動拠点本部」となる災害医療の要です。



当院DMATは、これまで常総の水害や熊本地震、能登の震災へ現地派遣を行ったほか、千葉県台風被害の際は活動拠点本部として現地救護や患者受け入れに奔走しました。先日の2026年8月の千葉豪雨においても、被災病院にDMATを派遣し支援しました。

豊富な実践経験と救命救急センターの強みを活かし、広域災害から地域医療まで、いかなる緊急事態下でも被災地の命を繋ぐ災害医療を提供します。

TEAM JIKEI

～全ては患者さんのために～

病院を支えるコメディカルの紹介（中央検査部編）

病院を支える医師以外の職種（コメディカル）について、ご紹介するコーナーです。
7回目を迎える今回は、中央検査部の業務をご紹介させていただきます。



附属病院（本院）
中央検査部
技師長
河合 昭人
Akito Kawai

中央検査部では「正しく、早く、安全に」を合言葉に、臨床検査技師が精度の高い検査と迅速な検査結果の報告に取り組んでいます。患者さん中心の医療を実践し、信頼される臨床検査部門となるよう努めています。

生理機能検査

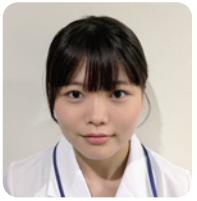
生理機能検査では、心電図や心エコー、脳波検査、呼吸機能検査などを通して、身体の状態や臓器の働きを調べています。患者さんの不安に寄り添い、安心して検査を受けていただけるよう、わかりやすい説明と丁寧な対応を心がけています。正確かつ迅速な検査データを提供し、診断や治療を支えています。



附属病院（本院）
添田 彩華
Ayaka Soeda

微生物検査室

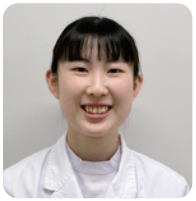
微生物検査室では、採取した血液、尿、喀痰、便などの検体を用いて、感染症の原因となる細菌を検出・同定しています。また薬剤感受性試験を実施し、どの抗菌薬が有効であるか調べることで、適切な治療につながる情報を提供しています。さらに、監視培養を行うことで耐性菌を早期に検出し、院内感染対策に貢献しています。



葛飾医療センター
齋藤 あす香
Asuka Saito

自家末梢血幹細胞採取

西部医療センターでは、自家末梢血幹細胞移植を開始しました。中央検査部では、移植に必要な細胞採取と凍結保存を担っています。最新の採取および分析装置を導入したことにより、質の高い細胞が採取できるとともに、患者さんの負担軽減が図られています。また、多職種がチームとなって、患者さん一人ひとりの状態に応じた、安全な細胞採取ができる体制を整えています。



西部医療センター
旗野 広奈
Hirona Hatano

血液学検査

血液学検査は、貧血や白血病などの病態、血液が固まる仕組みの状態など血液の成分を調べる検査です。専門の自動分析装置で血液中の成分を、顕微鏡では血液細胞の形態などを分析して医師の診断や治療を支えています。患者さんの血液の病気をいち早く見つけられるよう医師をサポートし、精度の高い検査結果を迅速に報告するよう努めています。



柏病院
清水 風里
Furi Shimizu

Jikei History 評伝 — 学祖 高木兼寛

松田 誠(故)
東京慈恵会医科大学 名誉教授

Vol.8 還暦すぎてオーナー・ドライバーに

高木兼寛は、若いころは西欧化運動に熱中し、晩年には神道などの国粋的運動に熱心であったため、一部の人からは「君子豹変」などと評されたことがあった。しかしこれを公平に眺めると、この第八話でのべるように、晩年になってもなお自動車の運転を習い、自ら日本最初期のオーナー・ドライバーになるなど、少しも保守化したようには見えないのである。

兼寛はもともと自分で動かせる乗り物には興味があったらしく、きわめて初期から自転車にも乗るし馬にも乗り、また馬車の駆者もすれば自動車の運転もしていた。それだけに多くの逸話や失敗談を残している。

日本に自転車が輸入されたのは明治20年であるが、兼寛はほぼ同じ頃にこれを購入している。その頃のこんな逸話が残っている。ある日、彼が自転車で紺屋町(兼寛の住所)の堀端を力いっぱい飛ばしていたところ、急に横道から人力車が飛び出してきたため、これを避けることができず、自転車もろとも堀りの中に落ちてしまった。びっくりした車夫は体の重い兼寛を懸命に救い上げ、やっと助けることができた。幸い怪我もなかったので、兼寛はこれに感謝して金5円也を贈った(5円といえば今日の5、6万円にもなる高額である)。予期しない高額の謝礼に二度びっくりの車夫は「こんなことなら高木先生にはもっとちょいちょい落ちて欲しい」と冗談をいって喜んだという。



兼寛はまた二輪馬車を上手に乗り回していた。この二輪馬車というのはガタガタ揺れて大変難しいものであったらしいが、兼寛はこれを上手に操ったという。ところがある日、馬が突然暴れだして大通りを馬車が暴走しはじめ、さすがの彼もこれをどうすることもできない、とうとう多くの人前で街路樹に衝突してやっと止まることができた。多くの見物人が心配するなかを、彼は悠然と「いい経験になったよ」と、いたって剛毅なところをみせたという。

自動車も、兼寛は民間人としてはもっとも早く購入し、しかも自らこれを運転していた(車のナンバーは70番であった)。日本で自動車が最初に輸入されたのは明治40年であり、その年の車数は全部で16台、6年後の大正2年の車数は892台であったというから、車のナンバー70から推して、彼が車を購入したのはおそらく明治42、3年頃であったと推測される。そうすると彼はもう優に60歳は超えていたはずであり、今とちがって当時の60数歳といえばもう老境である。しかも車購入者のほとんどはお抱え運転手を雇う人たちであるから(彼もすでに男爵閣下であった)、この年齢で自ら運転を習ってオーナー・ドライバーになろうとした彼の心意気はまことに壮と言うべきではなかろうか。

兼寛の自動車に乗せてもらった一人に日高 昻(慈恵医専眼科教授)がいる。彼の追憶談にこんなところがある。「私が芝紅葉館の宴会から帰らんとする時、『おい日高君、君は自動車に乗ったことがあるか、これで君の所まで送ってやるから乗れ』と云われたので、実際私は自動車に乗るのは初めてであるから大いに有難く、早速真ん中に乗り込んで男爵然と構え込んだ。本物の男爵閣下は運転手で、僅か七分で蛎殻町の拙宅に着いた。玄関から大声で、おーい今日は立派な自動車で帰ったぞ。運転手閣下にビールを差上げてくれ、と云ったものである」と。(幸い当時はまだアルコールの規制はなかったらしい)

兼寛はどこへ行くにもこの自動車を使っていたらしく、街でサボっている慈恵の学生がこのナンバー70の自動車を見ると、みな恐れをなして逃げたという逸話が残っている。

こうみてくると彼は晩年まで、あくまでも近代的合理主義者として、文明の利器を活用し、生活様式の改良を企てていたことは確かである。

写真:私立東京慈恵会医院医学専門学校　正門(明治42年)　出典:法人広報誌「The JIKEI」第9号

TOPICS

AIペットロボット「Moflin（モフリン）」が寄り添う新たなケア

こどもたちに、少しでも安心や安らぎを感じてもらいたい。

小児科学講座では、カシオ計算機株式会社と連携し、2026年2月9日より附属病院(本院)小児病棟の無菌病床に、AIペットロボット「Moflin（モフリン）」を導入しました。長期間にわたり限られた環境で入院生活を送るこどもたちに、少しでも安心や安らぎを感じてもらいたいという思いから始まった取り組みです。

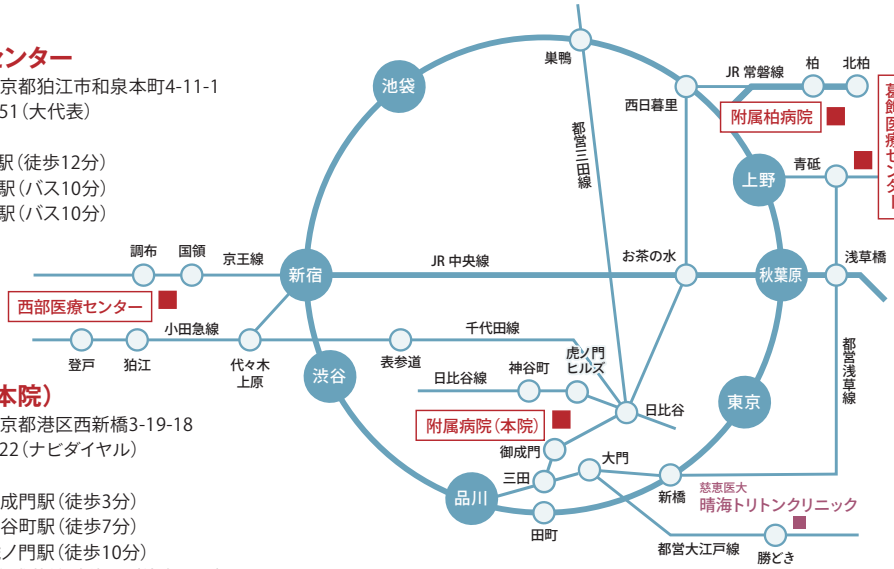
無菌病床では、感染予防のため人との接触や生活環境が制限されることが少なくありません。そのため、身体の治療だけでなく、こどもたちの心を支えることも医療の大切な役割です。



「Moflin」は、AIによって触れ合い方や関わり方を学習し、一人ひとりとの関係の中で少しずつ個性を育んでいく、新しいコンセプトのペットロボットです。日々の触れ合いを重ねることで、こどもたちのそばに静かに寄り添い、入院生活の中にほっとできる時間や自然な笑顔が生まれることを期待しています。

これからも小児科学講座では、医療従事者だけでは支えきれない部分にも目を向け、AIをはじめとする新しい技術や企業との連携も積極的に取り入れながら、こどもたちとご家族に寄り添う医療を実践してまいります。

Access



西部医療センター
〒201-8601 東京都狛江市和泉本町4-11-1
☎03-3480-1151（大代表）
Access
京王線　国領駅（徒歩12分）
京王線　調布駅（バス10分）
小田急線 狛江駅（バス10分）

附属病院（本院）
〒105-8471 東京都港区西新橋3-19-18
☎0570-03-2222（ナビダイヤル）
Access
都営三田線 御成門駅（徒歩3分）
日比谷線　神谷町駅（徒歩7分）
銀座線　虎ノ門駅（徒歩10分）
JR・銀座線・都営浅草線 新橋駅（徒歩12分）

柏病院
〒277-8567 千葉県柏市柏下163番地1
☎0570-04-7164（ナビダイヤル）
Access
JR常磐線 北柏駅
（徒歩10分/バス5分/タクシー5分）
JR常磐線　柏駅
（徒歩25分/バス15分/タクシー10分）

葛飾医療センター
〒125-8506 東京都葛飾区青戸6-41-2
☎0570-009-119（ナビダイヤル）
Access
京成線　青砥駅
（徒歩10分/バス6分/タクシー5分）
JR常磐線 亀有駅
（バス10分/タクシー5分）

発行者：学校法人 慈恵大学 広報課 https://www.jikei.ac.jp

本誌の記事はWEBサイトでもご覧いただけます